第194号　JAPAN ASHRAM　2019年1月1日

日本クリスチャン・アシュラム連盟

日本アシュラム

アシュラムとはスタンレー・ジョーンズ師がインドの退修方式を取り入れて創設されたキリストの新しい祈祷運動である。

開心　・　静聴　・　充満　・　献身　・　奉仕

〒181-0011　東京都三鷹市井口3-15-6　池の上キリスト教会内　日本クリスチャン・アシュラム連盟　振替口座　東京00100-1-4558

パウロの獄中でのアシュラム

エペソへの手紙　4章14～15節

日本同盟基督教団
大分恵みキリスト教会（連盟副理事長）
牧師　岡山　敦彦

ローマの獄中でパウロは、「ひざをかがめて、父の前に祈ります」とエペソ教会の信徒に書き送っています。彼は三回のアジアとヨーロッパの伝道旅行の後、エルサレムで捕らえられ、カイザリヤに移されて裁判にかけられます。ローマ市民権を持っていた彼は、カイザルに上訴してローマの法廷に立つことを願いました。地中海の船旅で様々な困難に遭遇しながらも、彼は念願のローマたどり着きます。

ローマでの様子をルカは使徒の働き28章30～31節でこのように記しています。「こうしてパウロは満二年の間、自費で借りた家に住み、たずねて来る人たちをみな迎えて、大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた」。パウロは伝道旅行の間、恐れることなく、大胆に福音を語ってきましたが、常に迫害が伴いました。ところが、ローマでは囚人のゆえに獄中から一歩も外に出ることができませんでした。パウロにとっては、苦痛の時、不自由な時を過ごさざるを得なかったと私たちは考えてしまいます。ところがパウロにとってローマの獄中は最高かつ最善の居場所でした。

第一に、彼は大胆に、少しも妨げられることなく、福音を宣べ伝えることができました。彼の家の前には、ローマ兵がいましたので、彼を迫害する者は誰一人として彼の家に立ち入ることはできませんでした。伝道旅行中に彼が経験した苦難が第Ⅱコリント11章23～27節に列挙されています。死に直面こと、むち打たれたこと、海上の難、川の難、荒野の難、飢餓の難と数えきれないほどの試みに会いました。それに比べれば、獄中の彼はあらゆる難から守られています。また、たずねて来る人たちに、大胆に福音を語ることができました。

第二の喜びは、自分には自由な時間が与えられたことです。少なくとも獄中から、エペソ、ピリピ、コロサイの教会とピレモンに手紙を書き、彼が開拓した教会の信徒たちを励ますことができました。自分が開拓した教会を整え、信仰生活に励むようにとアドバイスすることができました。

第三は、彼は神の前に祈り、黙想し、神との交わりを十分に持つことができました。アシュラムの最大の喜びは、神との深い交わりです。彼はその時までゆっくりと親しく神と交わる時間を確保できませんでした。しかし、獄中ではそれが許されたのです。そして、たずねて来る人たちと、恵みを分かち合うことができました。ローマの獄中は、パウロにとって至福の時、アシュラムの時でした。神が彼に二年間の安息の時を与えてくださったのです。

霊想

力の源泉、聖霊による喜び

（ヨハネ福音書15章11節）

（連盟理事長）
横山義孝

伝道力の源泉は、キリスト者の内に真の喜びがあるか否かに掛っています。トマス・クックはその著「新約のきよめ」の中で次のように言っています。「初代のクリスチャンたちの成功ある生涯の秘訣はあらゆる点で喜びに満たされていたことにある。・・・人々は雄弁とか議論とかその他の人間的能力によって惹きつけられるよりはもっと多く輝いた顔やあふれる心によって惹きつけられるのです」と。ヨハネ15・11で主は「これらの事を話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである」と仰せられました。主のご生涯の全てのみ業の中に「聖霊の喜び」が充満していたのだ。またその喜びはペンテコステ後の弟子達の内に満ちていたものです。その喜びが彼らの宣教活動に豊かな結果をもたらしたのでした。

（1）派遣された者の喜び

フィリピの獄屋に閉じ込められたパウロとシラスにこれを見ることができます。女奴隷から占いの霊を追い出すという愛の行為が二人を思わぬ迫害に遭遇せしめたのですが、彼らは主に派遣された者として、何の動揺も見せず真夜中に喜びの「讃美の歌を歌って、神に祈っていると、ほかの囚人はこれに聴きいっていた」（使徒言行録16・25）というのです。そこに突如大地震が起こって牢獄は混乱状態となり、自殺しかけた看守が恐れに身を震わせ救いを求めたのでした。この時のパウロとシラスの冷静さと福音への間髪を入れぬ大胆さと確信との基はどこから来たのであろうか。まさにこれは彼らがマケドニヤ伝道に遣わされている（同16・10）という聖霊による確信と喜びにあったと見ることができます。

（2）献げ尽くした者の喜び

フィリピ2・17以下にはパウロがフィリピの信徒に対して「信仰に基づいてあなたがたが生贄を献げ、礼拝を行った際にたとい私の血が注がれるとしても私は喜びます。あなたがた一同とともに喜びます。」といい、またロマ12・1では「こういうわけで兄弟達、神の憐みによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそあなたがたのなすべき礼拝です」と述べています。戦いの激しかったマケドニヤ伝道の緒戦がフィリピでしたが、フィリピの教会を喜びの教会としてパウロが絶賛した理由をここに見る事ができるのです。フィリピ教会の全信徒がその後パウロの伝道に対して、どれほど援助の祈りと、愛の手を差し伸べたかを考えるのですがその誘因は、彼らの喜びが主イエスの内に満ちていた喜びと一致していたからであるとみる事ができます。

（3）希望と喜びの、『内にいますキリスト』

パウロの内に満ちていた喜びは、彼の魂の内に主キリストご自身がお宿りになっていた故の内なる霊の源泉からほとばしるものがあったからです。彼の生涯もまたキリストゆえの苦難の連続であったのですが、これが彼には何物にもかえがたい賜物でした。「今やわたしはあなたがたの為に苦しむことを喜びとしキリストの苦しみの欠けたところを身をもって満たしています」（コロサイ1・24）といっていますが、実はこれは主ご自身が内に秘めていたものでした。「信仰の導き手であり、また完成者であるイエスを仰ぎつつ走ろうではないか。かれは自分の前に置かれている喜びの故に、恥をもいとわないで十字架を忍び、神の御座の右に坐するにいたったのである」（ヘブライの12・2口語訳）とあります。この十字架の苦しみを喜びの源泉とするという「代々に渡って隠されていた『秘められた計画』（コロサ

イ1・26）が神の聖なる者達に明らかにされるために、神は彼らにこの奥義を知らせようとされました。この奥義は『あなたがたの内におられるキリストであり、栄光の希望である』（同27口語訳）と宣べているのです。「聖霊による喜び」とは、信仰によって与えられた賜物であり、私たちを内側から押し出して、伝道と愛の業、宣教の働きへと力強く進みゆかせる命と希望、喜びと祝福の源泉です。E・スタンレージョンーズが信仰の明け渡しをもって体験した聖霊充満の恵みであり、アシュラムにおいて全てのキリスト者に期待されている経験です。私達はこの主の約束を信仰によって祈り求め、この時代にあって、神の国実現に向かって力強く進み行くものでありたく存じます。　栄光主にあれ、ハレルヤ。

「一日アシュラム」

単立函館栄光キリスト教会

信徒　佐藤邦子

十数年も前になるでしょうか、当教会婦人の祈り会でのある時、前任の白川鄭二牧師が、唐突にメモ用紙を半分に切ってみんなに渡しました。何が始まるのだろうかと思いました。「これに自分が今、願っていること、祈ってほしい事を書いて、隣の人に渡すように、そして祈り合いましょう」と言いました。この時が私のはじめてのアシュラムでした。

二〇一八年十月八日（月）函館栄光キリスト教会では第十回のアシュラムがもたれました。これまで二日間でしたが、今回は一日アシュラムでした。時間が十分にとれず、プログラムに追われるところがありましたが、それでも不思議な和みの中で、〈充満の時〉まで進められました。

毎年、市内の他教会の人達も交えてのアシュラムで、「いつも教会の中でこうして思いのたけを語り、祈り合えることは中々ないので、年一回のこの時が楽しみです」との声も聞かれ、これまで十回守られてきたことに感謝します。

私は数年前に関東アシュラムに出席しました。初対面の方達と寝食を共にしながら、主にある親しみと安らぎをしみじみ感じたのでした。〈祈りの細胞〉でご一緒し、私のニードを祈ってくださった方が、半年程して「その後娘さんはどうしておられますか」とお便りをくださいました。「あ～、その後もずっと祈ってくださっていたのだ」と、とても心打たれました。その後私も倣って〈祈りの細胞〉でご一緒した人のニードを、心に覚えた時は祈ることを心掛けるようになりました。

「二人、三人、わたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいる」（マタイ18章20節）。何よりも神さまが聞いてくださっている、祈ってくださっている、生きて働いてくださっている。そして尚、誰かが祈ってくださっている、と思えることは、何よりの力であり、幸いなことと思います。

最後になりましたが、今回のアシュラムには助言者として、島隆三先生をお迎えして、テサロニケの信徒への手紙一より「主のみ言葉が響く」と題してメッセージをいただきました。豊富なご経験と深い洞察に裏打ちされたお話は、しみじみと心に響いたのでした。お交わりの時に「この教会は祝福に満ちて、熱心さが伝わってくる。よくわかります。」と言ってくださいました。そのお言葉をそのまま受け取って、とても嬉しくなりました。満たされた集会でした。

第9回仙台アシュラムの報告

仙台青葉荘教会　信徒　松木恵美

第9回仙台アシュラムは6月16日助言者に榎本栄次師をお迎えして持たれました。参加者は21名でした。主題は「御心に適った悲しみ」で、

開会礼拝ではⅡコリント7章5～11節から語られました。「御心に適った悲しみ」とは何か特別なものなのか、と思っていましたが、この世の悲しみと御心に適った悲しみとに違いがあるのではなく、悲しみを神のもとに持っていく時に祝福に変えられる、と教えていただきました。静聴と分かち合いは4つのファミリーに分かれ、フィリピ書3、4章に聴きました。キリスト者の完全を目指して歩むこと、何ごとも主にあって(in Christ)行うことの喜びを示されました。今回はプログラムに余裕を持たせ、静聴と分かち合いは2回とし、ゆったりとした時間の中で過ごせました。榎本師は暖かい関西弁で、笑いもいっぱいの中に大切なメッセージを語り、導いてくださいました。

仙台アシュラムは以前、行われていたようですが、2010年に島隆三師がお声がけくださり、アシュラム班が組織され、再開されました。以来毎年6月に持たれ、第5回からは潮義男師が継続してくださり、9回を数えました。当初はアシュラム班の中にも、とまどいがあり、継続していけるか、いろいろな意見がありました。土、日の2日間のアシュラムを五年続けましたが、他教会の方は日曜日は出席が難しく、教会員もファミリーの中を出たり入ったりする状況があり、混乱したこともありました。そこで、2015年からは、一日アシュラムとし、全日程参加を条件としました。賛否の意見が聞かれましたが、アシュラムの心構えをお伝えし、理解していただきました。内容も毎年少しずつ改善し、現在に至っています。潮師に導いていただきながら、アシュラム班も自主的に働くことができるようになり、感謝です。これからも、アシュラムを大切にしていきたいと、願っています。

【小島十二師ご召天】

日本クリスチャン・アシュラム連盟理事、関西アシュラム支部長・小島十二師が昨年9月23日、関西アシュラムの朝、天に凱旋されました。スタンレー・ジョーンズ師の日本でのアシュラムを知るお方がまた一人天に帰られました。

昨年春「佛教を通ってキリストへ - 復刻版 -」を出版され、日本固有の宗教である佛教を解説しながら、現代人へのキリスト教を導き宣教されました。88歳のご生涯でした。

ご家族の上に、また芦屋川教会、イエス・キリスト教団の上に、主のお慰めと平安をお祈りいたします。

アシュラム予告

●第50回城北アシュラム
とき　2月11日（月）
会場　池の上キリスト教会
助言者　安藤　脩師

●第23回連盟全国理事会
とき　3月7日～8日
会場　池の上キリスト教会

●第10回仙台アシュラム
とき　6月15日～16日
会場　仙台青葉荘教会
助言者　島　隆三師

●浦和別所教会アシュラム
とき　6月
会場　浦和別所教会
助言者　未定

●第57回関東アシュラム
とき　9月9日～11日
会場　山崎製パン箱根山荘
助言者　榎本　恵師

●第54回九州アシュラム
とき　9月15日～16日
会場　福岡黙想の家
助言者　未定

●函館栄光キリスト教会ミニアシュラム
とき　10月14日
会場　函館栄光教会
助言者　未定

＊その他分かり次第お知らせいたします。

編集後記

二〇一九年も希望に満ち溢れた良き年でありますようにお祈りします。私たちを取り巻く環境は相変わらず厳しい状況にあります。願い祈り求めるならば与えられることを信じて歩んでいきたいと思います。一九四号が発行できましたことを感謝いたします。昨年同様に本年もよろしくお願い致します。